

令和元年5月29日現在

機関番号：12601

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2016～2018

課題番号：16K13162

研究課題名(和文)日本の洋楽における出版楽譜制作の歴史

研究課題名(英文)History of music engraving in western music in Japan

研究代表者

長木 誠司(Choki, Seiji)

東京大学・大学院総合文化研究科・教授

研究者番号：50292842

交付決定額(研究期間全体):(直接経費) 2,500,000円

研究成果の概要(和文):これまでほとんど研究対象とされてこなかった、日本の出版楽譜制作の歴史、すなわち楽譜出版の歴史ではなく、作曲者の手稿等から出版用の版下を制作する技術(music engraving)の歴史の概要が明らかとなった。高度な技術を持った職人たち、出版された楽譜に名前すら残らない職人たちによる制作の歴史は、従来まったく手が付けられなかった。明治以来、洋楽を受容した歴史はさまざまな観点から研究されているが、この楽譜制作の領域がどのような西洋の模倣から始まり、音楽出版界でどのように変容されてきたのかということ、出版譜の歴史や実際の技術者たちからの聞きとりによって追跡した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、楽譜制作の歴史を追いつつ、それが日本の洋楽作曲における、より複雑な作品やより大規模な作品の創作と連動しているという前提で両者の相互的な関係を常に視野に入れながら進められた。より高度な技術を課す楽譜が必要になった場合、楽譜制作の現場も知恵を絞った。それは創作にフィードバックされたが、そこではヨーロッパの楽譜制作技術を採り入れなかった、日本独自の制作方法であるがゆえに生じる歴史である。それを明確にし、日本における洋楽創作の新たな歴史的断面を明らかにした。出版譜から見る洋楽の歴史に、単なる出版技術史以上の奥行きを加え、同時に洋楽創作や受容の歴史にこれまでにはない視点を加えることになった。

研究成果の概要(英文): This research gains the historical survey of music engraving in Japan which up to now has not been the object of musicology, because it is only a history of anonymous craftsmen who have had highly evaluated technique. Within the context of research on western music reception this one tried to reveal some aspects of the development of music engraving in Japan by means of close examination of printed scores and notes as well as interview-based investigation of craftsmen.

研究分野：音楽学

キーワード：楽譜制作 楽譜出版 洋楽史

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

日本の洋楽楽譜制作はこれまでまったく扱われてこなかった。ヨーロッパの楽譜制作との関係を視野に入れつつ、音楽史的・技術史的・美学史的といった異なった歴史的な視点から、多角的にこの分野を解明することが必要だと考えたのが本研究出発点である。

これまでこのテーマが等閑視されてきた背景には、まず音楽研究が長年、作品分析や作品そのものの歴史的資料調査といった分野に集中していたという理由があり、媒介としての出版譜に目が及ばなかったという原因がある。もっとも1980年代以降、音楽学はより広い領域に関心を示し始め、音楽を生成する社会や制度、権力といったことへと視点を広げて、芸術という枠を超えた音楽活動やその周縁、そしてサウンド研究といったものに関心を向けてきた。しかしながら、従来の作品研究の際に楽譜中心的研究方法を採用していたため、逆に楽譜そのものから距離を置くという結果も招いてしまった。それゆえ、「音楽」という制度を考える上で、大きな役割を果たしてきたであろう楽譜制作そのものは、研究のトピックとしては死角となった感がある。

2. 研究の目的

これまでいっさい研究対象とされてこなかった、日本の出版楽譜制作の歴史を明らかにする。楽譜出版の歴史ではなく、作曲者の手稿等から出版用の版下を制作する技術 (music engraving) の歴史である。これは高度な技術を持った職人仕事であるが、出版された楽譜にも名前の残らない職人たちによる制作の歴史は、これまでまったく手が付けられなかった。明治以来、洋楽を受容した歴史はさまざまな観点から研究されているが、この楽譜制作の領域がどのように西洋から日本の音楽出版界に伝わり、またそれがどのように変容されてきたのかということは、まったく謎のままである。少なくとも昭和初期には美しい楽譜を制作出版していた日本の技術史を、西洋との比較と独自の発展のなかで明らかにする。

本研究は、かつてのような作品研究一辺倒への反省という下地を持ちつつも、それへの反撥として生じた1980年代以降の音楽学の方角を、あえて作品を成り立たせる楽譜に立ち戻って行うという意味で、音楽学の第3の方角を示唆する研究と見なしたい。

3. 研究の方法

本研究は、大別して4つの項目からなる。

ヨーロッパ及び日本における楽譜制作の技術に関する歴史的展開の確認。

楽譜制作技術に関する資料収集とその解析。

明治中期～昭和中期までの出版譜の収集とその系列の研究。

楽譜制作者へのヒヤリングとオーラル・ヒストリー用のアーカイヴの構築。

いずれの項目も、研究期間の3年間にわたって随時並行して行われるが、時系列や時代性が係わる対象に関しては、過去の事例から順を追って検討された。

4. 研究成果

基本的な作業として、楽譜制作とのその歴史に関する基本的文献や先行研究を丹念に当たった。洋の東西を問わず、制作技術そのものに焦点を当てた研究は少ない。出版譜の研究は、これまで主として手稿譜を読み取って制作する際の解釈の問題や異稿の問題、すなわち Edition の視点からの研究が多く (例えば、近年では Helga Lühning (hrsg.): *Musikedition* [Max Niemeyer, 2002] にまとめられているように)、制作自体の研究は限られているものの、1501年のペトルーシによる印刷技術の開発から近代に到るまでの楽譜出版については、A. Beverly Barksdale による *The Printed Note*. (Toledo Museum of Art, 1957) のような、500年の歴史を論じた古典的研究など、実践に係わる数点の文献で確認できる。D.W. Krummel と S. Sadie による *Music Printing and Publishing*. (Norton, 1980, 1990) も基本的な文献であり、楽譜制作の歴史に関しては M. Twyman の *Early Lithographed Music*. (Farrand Press, 1996) が大きな展望を与えてくれた。また各出版社が自社の紹介を兼ねて出版している文献、例えば、G. Henle (hrsg.): *Henle: Verlegerischer Dienst an der Musik*. (Henle, 1973) などがあつた場合は、それによって技術的問題やその発展史は辿ることができる。これら、限られた部数で市販もされないものを丹念に渉猟した。渉猟自体も本研究の課題のひとつであった。

日本の楽譜出版の歴史を最初期から追った。これは明治以来の出版譜を可能な限り収集し、それを時代、出版社、そして肝心の楽譜制作スタイルによって区分する作業によって行われた。国内の出版譜はけっして少なくはないが、音楽のジャンルやスタイルによる異同があり、収集作業とは別個に、3年間の研究期間内で時代を区切って比較検討した。この作業における本研究全体の時代的範囲は、明治中期から紀元2600年の奉祝楽曲の制作が行われた時期を経て、昭和中期ごろまでと考えており、初年度はまず、そのうち明治中期から大正初頭までの時期の楽譜を主として検討の対象とした。音符の形状や線の弾き方等々、印刷書式における異同の比較検討から、いくつかの系列を抽出し、時系列上にならべていくつかの歴史的傾向を読み解くことができた。

収集された楽譜資料へのアプローチは、曲種 (声楽・器楽) 作曲者、出典等々の解析が主となり、どのような曲にどのような制作が応用されてきたのかという点が肝心である。曲の複雑さに対して、技術がどのように対応したのかということ。また、ヨーロッパで制作された同作

品の楽譜との比較検討も、制作過程の探究上で大きな要因となった。そのため、第2年度には主としてベルリンとザルツブルクのアルヒーフで古楽譜の収集に努めた。また、時期的にはずれるが、20世紀後半の楽譜制作の実態も参考にしなかったため、バーゼルのザッハー財団にもお世話になった。

大正期における楽譜出版と制作の実情を対象にしたのも第2年度であり、第1年度に準じる形で収集し分析したが、この時期は日本の洋楽が非常に盛んになってくる時期であり、楽譜出版も格段に多くなり、需要に応じて曲種も増え、また同曲の異なる楽譜も増えているため、国内で制作された同作品同士の比較も可能であった。音楽出版社等々の違いによる制作技術の違いが数点に渡って確認されたが、名もなき職人たちの間でも出版社ごとに棲み分けがなされていたのではないかと推察される。

また、例えば山田耕筰の作品の出版資料などを含め、この時期にようやく現れ始めたオーケストラ総譜などを楽譜制作行程の視点から読み直し、初期のオーケストラ総譜がどのような努力の果てに制作されたかを検討した。同時にこの時期は、セノオ楽譜に代表されるように、楽譜自体の美術工芸的な捉え方がなされた時代でもある。こうした現象は、制作におけるある程度の技術的進歩がなければ生じ得なかったが、実際表紙のデザインや全体の作りからだけ評価されてきたこうした楽譜に関して、それを楽譜制作技術の面から見直す新たな研究視点が導入できた。

昭和中期までの楽譜資料収集と分析は第3年度に行われた。この時期はオーケストラ・スコアなど、複雑な楽譜の制作も広がっている。圧倒的に技術レベルがあがった証左であるが、多くはないながらも立派な楽譜の制作は、委嘱者、出版社等々の資料をひとつひとつの作品について丹念に追う必要があった。

そのため、実際に楽譜制作に携わっていた職人数名(みな高齢)ともコンタクトを取り、彼らの目で実際のさまざまな楽譜を見て判断してもらい、どのような技術が必要で、いかなる工程、技術、機材を用いていたのかを評価してもらいながら、当時の制作の現場を再構成することを試みた。1980年代以降、楽譜制作はフィナーレのようなコンピュータ使用による版下の作成が主流となり、作曲家自身もシベリウスなどの楽譜制作ソフトを使って実際に自分で楽譜を組んでしまっているが、そうしたコンピュータ使用の楽譜にも、実はかつての職人時代のノウハウが詰め込まれている。それは、連桁の書式や五線譜の幅、音符の大きさなどのバランスに反映されているが、そうした智恵を有する職人の方にしかできない判断を、戦前まで遡った楽譜に対して行ってもらった。日本は西洋の楽譜制作技術をどこかで学んだというわけではなく、自助努力で独自の方法を探り入れていた。烏口や手製の判子を用い、例えばドイツのヘンレ社のような活版を彫らずに版下を作ることが主流であったが、その方法が戦前のオーケストラ楽譜などからすでに用いられており、楽譜制作の技術に長足の進歩がなし遂げられた要因ではないかと思われる。

1980年代以降の新しい楽譜制作技術がどのようなノウハウを従来の制作工程や制作美学から継承しているのかということに関しては、新たに開発された楽譜制作用のタイプライターや初期の楽譜制作コンピュータ・ソフトの検証も交えて探った。タイプライター自体は遡ること100年前、1880年代には開発されていたが、それが主流にならなかった要因、そしてPC時代を迎えて機械製作が主流となる背景には、初期の機械に導入できなかった微妙な楽譜制作上のパラメータの存在があった。それらはある程度技術的に克服されてきたが、今後はその歴史と実態を今後、音楽における機械の歴史(自動演奏機械や音楽分析の器械)と並行して考察することによって、それらが西洋音楽の背景となる作品パラダイムや音楽制作のパラダイムとどのように連関しているのかが探られるはずである。

5. 主な発表論文等

[雑誌論文](計10件)

長木誠司 音盤街そぞろ歩き(122)アドルフ・フォーエヴァー・ヤング：翻訳なった『クワジ・ウナ・ファンタジア』賛 レコード芸術 68(2)、2019、61-64. 査読なし

長木誠司 音盤街そぞろ歩き(121)オペラ：愛の壊れるとき(7)静かな場所(承前) レコード芸術 68(1)、2019、61-64. 査読なし

長木誠司 音盤街そぞろ歩き(120)オペラ：愛の壊れるとき(6)海、静かな海(承前) レコード芸術 67(12)、2018、57-60. 査読なし

長木誠司 音盤街そぞろ歩き(119)オペラ：愛の壊れるとき(7)静かな場所 レコード芸術 67(11)、2018、61-64 査読なし

長木誠司 書評：近藤譲著『聴く人(homo audiens)―音楽の解釈をめぐる』音楽学 62(2)、2017、101-102. 査読あり

長木誠司 ディスク遊歩人：音盤街そぞろ歩き(108)グラントペラと知覚の変容 レコード芸術 66(12)、2017、64-68. 査読なし

長木誠司 ディスク遊歩人：音盤街そぞろ歩き(101)オペラ：愛の壊れるとき(3)ローエンゲリン(承前) レコード芸術 66(5)、2017、76-80. 査読なし

長木誠司 ディスク遊歩人：音盤街そぞろ歩き(100)オペラ：愛の壊れるとき(3)ローエンゲリン レコード芸術 66(4)、2017、62-66. 査読なし

長木誠司 ディスク遊歩人：音盤街そぞろ歩き(95)ベルリンの日本人村 レコード芸術

65(11)、2016、64-68. 査読なし

長木誠司 ディスク遊歩人：音盤街そぞろ歩き(93)ヘンレ版のヘンレさん レコード芸術
65(9)、2016、62-66. 査読なし

〔学会発表〕(計2件)

長木誠司 両大戦間の日本の音楽、一带一路シンポジウム・音楽 Music Integration and
Innovation Symposium Across the Silk Road (招待講演)(国際学会) 2018

長木誠司 シンポジウム「ダルムシュタットと秋吉台」、国際音楽学会シンポジウム「ダルム
シュタット受容」, 2017

〔図書〕(計2件)

長木誠司、ヘルマン・ゴチェフスキ、前島志保(編纂) 会館芸術 第II期 戦中篇(全13
巻) ゆまに書房、2017、3200.

長木誠司、ヘルマン・ゴチェフスキ、前島志保(編纂) 会館芸術 第I期 戦前篇(全11
巻) ゆまに書房、2016、2800.

〔産業財産権〕

○出願状況(計 件)

名称：

発明者：

権利者：

種類：

番号：

出願年：

国内外の別：

○取得状況(計 件)

名称：

発明者：

権利者：

種類：

番号：

取得年：

国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1)研究分担者

研究分担者氏名：

ローマ字氏名：

所属研究機関名：

部局名：

職名：

研究者番号(8桁)：

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。